

黒川温泉に学びたい、 地域共生の意識



フリーライター
小西 由稀

かつては閑古鳥が鳴いていた 予約が取れない山間の湯の郷

温泉が恋しい季節になった。最近では建物や料理、サービスに趣向を凝らした癒しの一軒宿に人気が集まっているが、“温泉郷”と括った場合、圧倒的な人気を誇るのは、熊本県の黒川温泉だろう。豊富な湯量・泉質を生かした多彩な露天風呂と、日本人の心の原風景を思わせる街づくりが共感を呼び、不便な立地にも関わらず、「もう一度行きたい」と言わせる温泉地に成長したのだ。

夏休みを返上し、ようやく取れた秋休みで念願の黒川温泉を訪ねることにした。以前から狙っていた宿に予約電話を入れたところ、「申し訳ありません、満室です」と、つれない。出発の1ヶ月以上前の予約、それも平日の宿泊にも関わらずである。すでにキャンセル待ちが何組もいるという。泊まってみたくらい宿リスト上位7軒から、同じ答えが返ってきた（黒川の宿は03年11月現在、約30軒）。黒川人気の高さを身を持って実感した旅のはじまりだった。



茶色に塗った
ガードレール



黒川温泉の
手書き看板

さて、北海道から黒川温泉へは、新千歳～福岡の直行便を利用。レンタカーで九州自動車道～大分自動車道を通って約2時間30分。この距離感では北海道だと札幌～富良野間だろうか。2時間30分で福岡、大分、熊本と3つの県を越えるのかと思うと、改めて北海道の大きさを実感してしまう。北海道と道外の旅行者とでは、どうりで距離感の捉え方が違うはずだ。

黒川温泉は、熊本県の阿蘇山麓に広がる南小国町に位置する。雑木林に囲まれ、溪流が流れるのどかな雰囲気は、「古き良き日本」を感じさせる風情。大分県との県境にも近く、湯布院温泉からも1時間の距離なので、旅程に湯布院と黒川を組み込んで楽しむ旅行者が多い。

黒川の名前が、雑誌に登場するようになったのは、10年ほど前。人気が定着したのはここ5、6年のことと記憶している。にわかには信じ難いが、それ以前は閑古鳥が鳴く鄙びた温泉地だったと聞く。街の人にかつての状況を尋ねると、過剰な設備投資、街に個性がない、閉鎖的など、北海道、いや全国の苦境にあえぐ温泉地と同じ状況ではないか。ということは、黒川に学ぶヒントは各地の温泉地にも生かすことができるかもしれない。

もてなしとは何だろう 宿と街と道の共同体意識

黒川を救ったのは、各宿が趣向を凝らしてつくった露天風呂。露天風呂の有無は、宿選びの決め手となる重要な選択肢。3つの露天が日帰り入浴できるお得な「入湯手形」（1200円）のアイデアもまた、人気を支える大切な要因だ。

街全体の環境づくりにも学ぶところが多い。周囲に溶け込むように、日常を意識させるガードレールはこげ茶色に塗っている。街路灯の銀色の支柱も茶色にペイント。路上の自動販売機の側面を木で囲ったり、乱立する看板を統一したり、看板文字を手書きにしたりと、自然との

融合にこだわった。客は温泉街をそぞろ歩きながら、非日常を演出する心地よい黒川マジックに魅せられていくのだ。

その延長として行っている、自然環境への取り組みも好感度が高い。露天風呂にかけ湯スペースはあるが、洗い場はほとんどない。また、露天ではハーブを使った浴用石けんのボディソープを、内風呂には加えて、同素材のシャンプーとリンスを設置している。これらは、合成洗剤の利用を控え、自然を美しく保つための配慮。これが黒川の宿、全館に徹底されているという。

いくつかの例を挙げただけでも、一軒一軒の壁を取り払い、地域共生の意識が宿はもちろん、温泉街の商店にも根付いていることがよくわかる。「のんびり過ごしてもらいたい」気持ちや、温泉客にも伝わってきて、何とも雰囲気の良い街なのだ。

今回の旅では、黒川周辺にある一軒宿、湯布院温泉なども見てきたが、評判の宿や温泉地には、それ相応の「なるほど」が見つけれられた。宿泊で人気なのは、別荘感覚の離れ（一軒家タイプの部屋）で、専用の露天風呂を完備。部屋の中で過ごす寛ぎの時間をどう演出するか、が鍵になっている。食事は地の素材や郷土料理を取り入れたものが主流。ある山間の宿では、刺身は美しい器に盛りだされた2種類のみ。その代わり、囲炉裏で焼いたヤマメ、馬刺し、豊後牛など、山の宿らしい華のある料理が多く、海の幸に頼らずとも大いに楽しめた。

全般的に共通しているのは、客をもてなす努力と演出力。これを各宿が、黒川では温泉郷全体で取り組んでいる。空間・時間・味・サービスが上質であれば、客は何度でも来くなるのだ。現に、九州のリピーター客の多くは大阪や東京から。距離感も、現地のアクセス状況も北



のぼりや看板のない道やまなみハイウェイ

海道とそう変わらない。ならば、北海道でも可能なはず。宿一軒一軒の質向上はもちろん、温泉郷全体として客をもてなす身の丈に合った工夫が必要だと痛感した。

同じことは道路にも言えるのではないだろうか。熊本県を走って印象深かったのは、道路にムダな看板やのぼりが少ないこと。特にやまなみハイウェイ、阿蘇ミルクロードなど、景観が美しい道沿いには、一部ドライブインなどののぼりは立っていたが、北海道でよく見る「交通安全」「スピード注意」といった類は皆無だった。阿蘇の山々を眺める大観望から内牧温泉に向かう国道212号には、阿蘇山をバックに記念写真を撮れる停車スペースがいくつも用意されていた（元々はカーブでの安全面を考えてのことかもしれないが）。旅行者の立場に立つと、どちらの道路が「もう一度走りたくなる」道だろうか。黒川のある宿のご主人は、「旅館が“部屋”で、道路が“廊下」と語っていたが、まさにその通り。街も道路も、今後は地域の共生意識を持つことが大切ではないだろうか。



阿蘇の山並みとカルデラ

停車スペースで景観を楽しむ
国道212号